

## 「腰縄と面縛」補遺

下向井 龍彦

はじめに

最近、藤原純友の乱に関する一般向けの著作を執筆する最終段階になって、純友と陽成上皇の接点の可能性について調べようと『扶桑略記』をめぐっていたら、『続日本紀研究』三八七号（二〇一〇年八月）に発表された『腰縄』と『面縛』——松本政春氏の軍団兵士制理解に触れて——を準備するさいに探していた「腰底」「面縛」の語に出くわした。また『本朝世紀』で純友の「次将」藤原文元の逃避行の記事を見直していて、それまであまり気に留めなかった「数足跡」の語に眼が止まった。ついでにデータベースなどを利用して『日本書紀』『平安遺文』『玉葉』『吾妻鏡』『太平記』の「面縛」事例を検索していたら、「面縛」について重大な問題に気付くことになった。そこで、これらの事例を前稿の補遺として紹介しようと思う。

前稿で私は、小林春樹氏の研究<sup>1)</sup>に拠りながら、「面縛」は降服儀礼としての自主的面縛であり、松本政春氏<sup>2)</sup>の言うような勝者の側が投降者を縛り上げる行為ではない、と断言した。今回の事例検索においても、八世紀まではそう言い切って間違いないことが確認された。だが、『玉葉』『吾妻鏡』にみえる「面縛」の事例は、律令法・公家法・荘園法・武家法では、通常、拘禁免除特権を有していたはずの公卿や荘官や御家人

を「面縛」して辱めるものであり、『太平記』になると投降者や捕虜を勝者の側が「面縛」するようになっていく。あきらかに「面縛」は、自ら後ろ手に縛って投降する降服儀礼を表す語から、拘束する側または合戦の勝者が被拘束者または敗者を「いましめ（縛め）」て辱める行為を表す語に語義転換している。罪人・降人・生け捕りを「縛め」て辱める平安後期の粗暴な「武士の習い」が、「面縛」の語義転換をもたらしたものと考えられる。

松本氏が、軍団兵士の中心任務が罪人追捕であるということを証明しようとして提起した「面縛」の問題は、図らずも重大な問題を提起していたといえよう。

### 一、「面縛」の補遺——語義転換——

中国史における「面縛」を含む「降服儀礼」について、小林春樹氏からいただいた拙稿抜刷に対する御返書のなかで的確に定義してくださいているので、私信ではあるが紹介させていただく。

「素衣銜玉」、すなわち白い死装束を身にまとい、死者と同様に玉を口に含むとともに、みずから後ろ手に縛ったうえで、配下の者に棺を挽かせて降伏すること、そのような降伏者の行為を受容した側の者が降伏者の口から玉を取り出し、面縛を解いて、いわば死者と

しての降伏者を「再生」させてやること、それによつて真の意味で降伏を成就させてやること。大きくわけてこの二つの「儀礼」から構成されるが故に、基本的に「死と再生」の儀礼としての性格を内包する「面縛」を伴う降伏儀礼が、単なる捕縛行為ではありえないことは自明のことである。

小林氏からは、氏が中国史で解明した降服儀礼を「日本、朝鮮という東アジア世界にまで拡大して」とらえることの重要性を含めて、私見が「正鵠を射たもの」であるという感想をいただいた。

さて、『日本書紀』に「面縛」の事例は三例あり、前稿では神功皇后摂政前紀の新羅王降服伝承をあげた。これ以外に垂仁紀・景行紀に事例があることは知っていたが、神話伝承ということもあり、前稿では取り上げなかった。しかし同じく伝承である神功皇后紀記事だけあげて他の二例を見捨てるのは問題であらう。

### ①垂仁天皇皇后狭穗姫、面縛せず自経

天皇幸<sub>二</sub>来目<sub>一</sub>、居<sub>二</sub>於高宮<sub>一</sub>、時天皇枕<sub>二</sub>皇后膝<sub>一</sub>而昼寝、於是、皇后既无<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>事、而空思之、兄王所<sub>レ</sub>謀、適是時也、（中略）因以奏請曰、妾始所<sub>レ</sub>以逃<sub>二</sub>入兄城<sub>一</sub>、若有<sub>レ</sub>因<sub>二</sub>妾子<sub>一</sub>免<sub>二</sub>兄罪<sub>一</sub>上平、今不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>免乃知、妾有<sub>レ</sub>罪、何得<sub>二</sub>面縛<sub>一</sub>、自経而死耳、（後略）

（垂仁天皇五年十月朔日条）

垂仁天皇の皇位簒奪をたくらむ狭穗彦王が、妹の垂仁皇后狭穗姫に垂仁暗殺を託すが、皇后は果たせず、兄の謀反を天皇に告白する。狭穗彦王は稲城を築いて籠城し、皇后は我が身を楯に兄の免責を願うために皇子誉津別命とともに稲城に入るが、天皇は攻撃を命じ稲城を焼き払わせる。引用記事の（中略）に次ぐ部分は、皇子を抱いて城から出てきた皇后の発言である。自分に免じて兄を許してほしいという願いが聞き入れられなかったということは自分の罪も確定したということだから、どう

して面縛して謝罪降服することができようか、自経（縊死）するだけだと言つて自殺した、という。

### ②蝦夷賊首、日本武尊に面縛して降服

爰日本武尊則從<sub>二</sub>上総<sub>一</sub>、入<sub>二</sub>陸奥国<sub>一</sub>、（中略）蝦夷賊首嶋津神・国津神等、屯<sub>二</sub>於竹水門<sub>一</sub>而欲<sub>レ</sub>距、然遙視<sub>二</sub>王船<sub>一</sub>、予怖<sub>二</sub>其威勢<sub>一</sub>、而心裏知<sub>二</sub>之不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>勝、悉捨<sub>二</sub>弓矢<sub>一</sub>、望拜之曰、仰視<sub>二</sub>君容<sub>一</sub>、秀<sub>二</sub>於人倫<sub>一</sub>、若神之平、欲<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>姓名<sub>一</sub>、王对之曰、吾是現人神之子也、於是、蝦夷等悉慄、則褰<sub>レ</sub>裳披<sub>レ</sub>浪、自扶<sub>二</sub>王船<sub>一</sub>而着<sub>二</sub>岸<sub>一</sub>、仍面縛服罪、故免<sub>二</sub>其罪<sub>一</sub>、因以、俘<sub>二</sub>其首帥<sub>一</sub>、而令<sub>二</sub>從身<sub>一</sub>也、蝦夷既平、

（景行天皇四十年是歲条）

東国を平定して陸奥に入った「日本武尊」の軍船を見た蝦夷賊首らが、武尊の威勢と名乗りに怖じ気づいて弓矢を捨てて「面縛」して罪に服した。

二例とも、宮廷伝承を『日本書紀』がさらに加工した物語であり、謝罪降服を表す語として「面縛」を定型句として使っている。当然ながら「面縛」は謝罪降服する側の「自主的面縛」であり、降服を受け入れる側の行為として想定されてはいない。『日本書紀』が編纂された七世紀末〜八世紀初頭において、「面縛」とは謝罪降服の身体儀礼を指す概念だったのである。

### ③陽成上皇による駿河介某女子の面縛

每日有<sub>レ</sub>聞、陽成君院有<sub>二</sub>駿河介女子<sub>一</sub>、令<sub>二</sub>院人追<sub>レ</sub>捕之<sub>一</sub>、極凌轢、甚憂也、以<sub>二</sub>琴絃<sub>一</sub>面縛、漬<sub>二</sub>于水底<sub>一</sub>、云々、

（扶桑略記）寛平元年（八八九）十月二十九日条）  
陽成院に駿河介某の女子が仕えていたが、陽成上皇は院人に彼女を拘束させ、暴行を加え、「琴絃」で「面縛」し水責めにした、という。思わ

ず身震いするおぞましい記述である。ここでの「面縛」は、謝罪降服儀礼としての「自主的面縛」の用例ではなく、小林氏が中国史料で類型化した、縛り上げて虐待し辱める「強制的面縛」の用例であり、私が確認した範囲で、日本において辱めることを目的とする「強制的面縛」の初例である。

『扶桑略記』寛平元年条には、他に陽成院人(院司や従者)が世間に充満して粗暴な行動をしているとか、陽成院が乗馬で京内下人宅に押入り従者たちが杖鞭を持って乱暴をはたらいたとか、陽成院が武装従者を引き連れて山城国宇治郷や摂津国嶋下郡で勝手に狩猟して住人を困らせているとか、陽成母后高子が菩提寺東光寺座主善祐の児を妊っているなどという記事が集中してみられる(そのいくつかは左大臣源融の奏聞に告げ口による)。これらのスキャンダルは、讓位後の陽成院の憂さ晴らしの行動や皇太后高子の善祐への信任を、宇多朝の政府が意図的に吹聴し、陽成院の「悪君之極」「物狂帝」を印象づけようとするものであり、この「面縛」記事を鵜呑みにしてはいけない。また本記事の原史料に「面縛」の語が使われていたかどうか慎重でなければならぬが、『扶桑略記』が編纂された一一世紀末から一二世紀初頭のころ、すでに辱めるために縛り上げる(「縛める」)行為を「面縛」と称する用法が一般化していたのは確実である。

#### ④藤原基通、下野守源義家に面縛降

宣旨、散位藤原基通面縛降之由、下野守源義家所言上<sub>二</sub>也、然則陸奥守源頼俊不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>向<sub>二</sub>陸奥国追討<sub>一</sub>者、義家朝臣依<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>所<sub>二</sub>申請也、抑頼俊合戦時、基通奪<sub>二</sub>取彼印鑑<sub>一</sub>者也、

〔扶桑略記〕延久二年(一〇七〇)八月一日条)

拙著『武士の成長と院政』(講談社版『日本の歴史』07巻 二〇〇一年)でも紹介した事例であるが、前稿執筆に当たって失念していた。延

久二年十二月二十六日、陸奥守源頼俊は、(おそらくは延久荘園整理令にもとづく国内検注の強行に反抗した)藤原基通ら国務対捍者を悉く追討して斬首・捕虜にしたので首級・捕虜を隨身して上洛したいと政府に報告したが、『朝野群載』巻十一 延久三年五月五日官宣旨、事実は報告とは相違しており、頼俊は基通と合戦したとき国司権力の象徴である印鑑を奪取されていた。基通が下野国に越境して下野守源義家のもとに「面縛降」すると、義家は、頼俊に追討宣旨を与えないように政府に求め、同年十二月三十日、降人基通を連れて上洛したいと報告した(『扶桑略記』)。陸奥国に勢力を扶植しようとする頼俊の活動を妨害する義家の行動が興味深い。基通は京に進上されることなくそのまま下野国に流人として留住したようだ(『朝野群載』巻十一 大治三年(一一二八)八月二十八日申文)。

これは「降服儀礼」としての「自主的面縛」であるが、下野守義家が基通の「面縛降」を認めたので、もはや追討宣旨を頼俊に下すことは不要である、という義家の主張は、政府の「面縛」観からみても、受容されることになる。

私が見た限り、「降服儀礼」としての「面縛」の例はこれが最後である。それに継起するかのように、一二世紀以降にみえる「面縛」の例は、武士が、拘禁免除特権を有する公卿や荘官や、主人の使者を縛り上げて辱める「強制的面縛」、また戦場で降人・生捕りを縛り上げて辱める「強制的面縛」ばかりである。ここに「面縛」の語義転換を認めることができる。松本政春氏が想定したのはこのような「面縛」だと思われるが、そのような用例は八世紀には認めがたく、一二世紀以降一般化していく用法だったのである。

そのような用例を具体的にみていこう。

## ⑤面縛人左大臣藤原經宗を東宮傳に任ず

坊官除目、

東宮、

傳從一位藤原朝臣經宗、兼左大臣、

學士從四位上藤原朝臣光範、兼文章博士、

學士從五位上藤原朝臣親經、兼宮内權少輔、

春宮坊、（中略）

面縛人、任傳、未曾有事、

康和立坊、為房可任亮、敦宗可任學士、而共依為刑人、不

被任之、俊信一人、任學士、敦宗追任之、顯季任亮昇進之

所、為房補之、是皆青宮之事、殊避忌諱之故也、流刑之者、猶

嫌之、況面縛之人哉、學士、亮等猶撰人、況於傳哉、時移風變、

蓋此謂歟、莫言々々、

『玉葉』治承二年（一一七八）十二月十五日条

言仁親王（安德）立太子にあたって、左大臣藤原經宗が東宮傳に任じられたが、右大臣兼実は「面縛人」が「傳」に任じられるのは「未曾有事」であるとし、宗仁親王（鳥羽）立太子のとき藤原為房・同敦宗が「刑人」であることを理由に東宮亮・東宮學士に任じられなかった例を挙げ、「流刑之者」でも避けたのだからいわんや「面縛之人」は外すべきであろう、との感想を記している。經宗が「面縛之人」とされるのは、永暦元年（一一六〇）二月二十日、二条天皇親政を目指していた当時権大納言だった經宗が、後白河院の逆鱗に触れ、院の命を受けた当時大宰大貳であった平清盛に、夜間、八条内裏で「搦召」され、二十八日解官、三月十一日、阿波国に配流されたことを指す（『一代要記』『百鍊抄』）。本記事によれば、清盛は逮捕した經宗を「面縛」していたのであった。『平治物語』（下 經宗・惟方遠流に処せらるる事）では、後白河院の「召禁よ」という仰せに、清盛が郎等の武士を差し向け、警固の武士を

討ち殺して經宗を「召捕て」、院の中庭に「引居た」という（『一代要記』では「被搦了」とある）。検非違使ではない清盛による郎党武士に命じての經宗の逮捕、院の面前への引き出し、院による流罪言い渡しは、朝廷刑事手続きにおける公卿に対する身柄確保・連行の方式を逸脱した、夜間、武士を遣わしての粗暴で屈辱的な「面縛」だったのである。

坊官除目では、面縛・流刑された經宗の経歴が流刑の為房と対比され、より深い瑕疵と見なされている。そもそも公卿が武士に「面縛」され恥辱を受けるなど当時としては考えられないことであり、經宗は「面縛」された公卿として、公卿たちの記憶に焼き付けられていたのである。

ところで、「いましめ」が「面縛」であるなら、平治の乱後の二条天皇と後白河院の対立のなかでなされた近臣逮捕の応酬を、『平家物語』（巻一 二代后）は「永暦・応保の比よりして、院の近習者をば内より御いましめあり、内の近習者をば院よりいましめらるゝ間、上下おそれるゝいてやすい心もなし」と描いており、それらは武士を使つての「面縛」の応酬だったのである。本来拘束免除特権を有する貴族が、いとも簡単に「いましめ」＝「面縛」され、京中を引き立てられていく光景に、貴族から庶民まで京内の人々は震え戦いたのである。

## ⑥左衛門尉平光弘、牧下司清科行光を面縛す

楠葉河北御牧下司清科行光者忠行舎兄也、□□四月四日件行光三男光貞聊酒狂之間、刃傷御牧住人前武□所定康之所從、件定康者左衛門尉光弘之近親也、無□搦取行光三男光貞、召禁光弘郎等宗清之許、親父□恐彼等猛惡、不指出首、次日依御廐司召參上京都之間、□發遣數輩之郎從、於桂河邊搦取行光、返遣御牧、籠其□□櫃、打捉於手足一及死門、經廿余箇日、放免行光一畢、於光貞者已□□、凡御牧下司往古近來、直面縛之条、未曾承及、因之御牧下□寄人等、立門進解狀、如レ此之

間、光弘還可殺害忠行一由、成<sup>二</sup>支度<sup>一</sup>之口聞、然間去五月十日立<sup>三</sup>札於近辺一也、札銘別紙注進之<sup>四</sup>、(以下略)

(長寛二年(一一六四)六月日主計允惟宗忠行義絶状 陽明文庫所藏兵範記仁安二年夏卷裏文書『平安遺文』七卷三二八六号)

引用した惟宗忠行義絶状は、当時の荘園内の刃傷事件や義絶の実例として、また武士・非武士(文人)の領主が入り交じる畿内地域社会の具体像として、さらに武士論<sup>5</sup>においても重要な史料であるが、ここでは「面縛」の事例として前半の三分の一ほどの意味をとってみよう。

長寛二年四月四日、主計允皇太后宮属惟宗忠行の舍弟である撰関家(関白基実)領楠葉河北牧下司清科行光の三男光貞が酒の席で同牧住人前武者所源定康<sup>6</sup>の所従を刃傷した。定康は光貞を「搦取」つて、近親の左衛門尉平光弘<sup>7</sup>・郎等宗清宅に「召禁」じた。行光は彼らの「猛悪」を恐れて宗清宅に行かなかつた。翌日、行光が撰関家御厩司の呼び出しを受けて京都に参上したところ、光弘が「数輩之郎従」を遣わし桂川あたりで行光を「搦取」らせ、行光を牧に連れ戻して郎等宗清宅に手足を縛つて召し籠め、二〇日以上経つて放免した。撰関家領楠葉牧下司をいさなり「面縛」するなど往古から近來に到るまで聞いたことがない。そこで牧下司寄人らが行光舎兄の惟宗忠行宅門に来て光弘を撰関家に訴える解状を進めた。すると光弘が撰関家に訴えられることを恐れて忠行殺害の準備をしているとの風聞が、忠行のもとに聞こえてきた。しばらくして忠行宅の近辺に、訴えようものなら殺害すると予告する立札が立てられていた。(それに恐れをなした忠行は、累が及ぶのを回避するため、舎兄行光を義絶した。この義絶状はその後撰関家司平信範が日記『兵範記』の料紙として使っているから、信範のもとに提出されたものである)。

左衛門尉光弘が郎従に行光を「搦取」させたこと、行光が手足を縛られて拘禁されたことを、行光は「面縛」されたと云っている。拘禁免除

特権を有する楠葉牧下司にとって、「面縛」されたことは名状しがたい恥辱なのであつた。「面縛」したのは「武士」平光弘であつた。京内の貴族社会で、院・天皇の命により、武士が拘禁免除特権を有していた嫌疑者(貴族・官人)を粗暴に縛り上げる「面縛」が横行するようになったころ、畿内の在地社会でも、拘禁免除特権を有していた荘官が、武士によって「面縛」される事態が横行するようになっていたのである。

#### ⑦清盛、藤原成親をほとんど面縛におよぶ

辰刻、人伝云、今晚、入道相国坐<sup>二</sup>八条亭<sup>一</sup>、(中略)今且招<sup>三</sup>寄成親卿<sup>一</sup>、同以禁錮、殆及<sup>二</sup>面縛<sup>一</sup>云々、武士充<sup>三</sup>満洛中<sup>一</sup>、雲<sup>二</sup>集禁裏<sup>一</sup>、

『玉葉』安元三年(一一七七)六月一日条)

安元三年五月二十九日夜半、撰津源氏多田行綱が清盛に後白河院と院近臣らが法勝寺僧俊寛の鹿ヶ谷山荘に集まつて平氏打倒クーデターを計画していたことを密告した。いわゆる鹿ヶ谷の陰謀である。六月一日に平氏の軍勢によって西光・成親が逮捕され、西光はすさまじい拷問を受けて斬殺され、二日、成親は清盛によって私的に備前国に配流され、後日その地で殺された。記事は成親が呼び出され禁固された部分である。『平家物語』(巻三)では、平家の武士たちは「左右の手をとってひっぱり、いましむべう候やらむ(縛るのでございますか)と申」し、清盛がそれには及ばないという、(縁の上にひきのぼせて、ひとまなる所にをしこめ)たとある。成親は武士たちに粗暴に引き立てられ清盛の前に引き出される際、「面縛」されそうにはなつたが「面縛」されはしなかつたのである。『玉葉』の「殆及<sup>二</sup>面縛<sup>一</sup>」というのは、このような事態を指していた。

平治の乱後、平清盛の配下の郎党ら武士によって、京内外において、貴族・武士・荘官らに対して粗暴な「面縛」が横行するようになったのであつた。

## ⑧片岡次郎常春、鎌倉殿御使を面縛す

以下の三例は、『吾妻鏡』に見える鎌倉幕府御家人社会における「面縛」の例である。

片岡次郎常春依<sup>レ</sup>有<sup>二</sup>謀叛之聞<sup>一</sup>、遣<sup>二</sup>雑色<sup>一</sup>於彼領所下総国、被<sup>レ</sup>召之處、称<sup>レ</sup>乱入領内、乃傷<sup>二</sup>御使<sup>一</sup>面縛云云、仍罪科重畳之間、被<sup>レ</sup>召放所帶等之上、早可<sup>レ</sup>進<sup>二</sup>件雑色<sup>一</sup>之由、今日被<sup>レ</sup>仰下云云、

『吾妻鏡』治承五年（一一八二）三月二十七日条

頼朝は、治承五年三月、片岡次郎常春に謀叛の疑いありとして、召喚の御使を派遣したが、常春は所領内に乱入したと称して御使を刃傷し「面縛」した。頼朝は、その罪科によつて所領没収と御使の釈放進上を命じた。源平内乱期の武家社会では、所領侵入者を「面縛」するのは当然の行為だったようである。

## ⑨不審者を頼朝御前に引きだし面縛す

渡<sup>二</sup>御于新造御堂地<sup>一</sup>、犯土之間、運<sup>二</sup>土石<sup>一</sup>疋夫等之中、有<sup>二</sup>左眼盲之男<sup>一</sup>、幕下覽怪<sup>レ</sup>之、彼者自<sup>二</sup>何国誰人<sup>一</sup>進哉之由被<sup>二</sup>尋仰<sup>一</sup>、仍景時雖<sup>レ</sup>相<sup>二</sup>尋之<sup>一</sup>不<sup>二</sup>分明<sup>一</sup>、被<sup>レ</sup>召<sup>二</sup>寄御前<sup>一</sup>、佐貫四郎大夫伺<sup>二</sup>御目<sup>一</sup>、面縛之處、懷中帶<sup>二</sup>一尺余打刀<sup>一</sup>、殆如<sup>二</sup>寒氷<sup>一</sup>、又覽<sup>二</sup>其盲<sup>一</sup>、以<sup>二</sup>魚鱗<sup>一</sup>而覆<sup>二</sup>眼上<sup>一</sup>、弥知<sup>二</sup>食有<sup>一</sup>害心者之由、被<sup>レ</sup>推<sup>二</sup>問之<sup>一</sup>、名謁申言、上総五郎兵衛尉也、為<sup>レ</sup>奉<sup>二</sup>度幕下<sup>一</sup>、数日経<sup>二</sup>廻鎌倉中<sup>一</sup>云云、即下<sup>二</sup>賜于義盛<sup>一</sup>、可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>召<sup>二</sup>尋同意輩<sup>一</sup>之旨、被<sup>レ</sup>仰<sup>二</sup>含之<sup>一</sup>云云、

『吾妻鏡』建久三年（一一九二）正月二十一日条

頼朝が御堂を新造する土地を検分したとき、犯土のため土石を運ぶ匹夫のなかに怪しい男がいることを見咎め、御前に引き出させ、佐貫四郎大夫広綱に命じて「面縛」させたところ、懷中に打刀を隠し持っていた。尋問させると頼朝暗殺を企んでいたことを自白し、上総五郎兵衛尉忠光と名乗った。

鎌倉殿頼朝の御前に罪人・不審者を引き出すとき、その者は「面縛」されたのである。

## ⑩囚人胤長を面縛し、一族の面前を通過させる

義盛<sup>千鶴持</sup>者<sup>不關地水</sup>今日又參<sup>二</sup>御所<sup>一</sup>、引<sup>二</sup>率一族九十八人<sup>一</sup>、列<sup>二</sup>座南庭<sup>一</sup>、是可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>厚<sup>二</sup>免囚人胤長<sup>一</sup>之由、依<sup>二</sup>申請<sup>一</sup>也、広元朝臣為<sup>二</sup>申次<sup>一</sup>、而彼胤長為<sup>二</sup>今度張本<sup>一</sup>、殊廻<sup>二</sup>計略<sup>一</sup>之旨、聞食之間、不<sup>レ</sup>能<sup>二</sup>御許容<sup>一</sup>、即自<sup>二</sup>行親・忠家等之手<sup>一</sup>、被<sup>レ</sup>召<sup>二</sup>渡山城判官行村方<sup>一</sup>、重可<sup>レ</sup>加<sup>二</sup>禁遏<sup>一</sup>之由、相州被<sup>レ</sup>伝<sup>二</sup>御旨<sup>一</sup>、此間、面縛胤長身、渡<sup>二</sup>一族座前<sup>一</sup>、行村令<sup>レ</sup>請<sup>二</sup>取之<sup>一</sup>、義盛之逆心職而由<sup>レ</sup>之云云、

『吾妻鏡』建曆三年（一二二三）三月九日条

和田義盛が一族九十八人を引率して御所に参上して、謀叛張本として預け置かれていた一族の胤長の赦免を求めたとき、頼朝は北条義時を通じて許容しないことを伝えさせ、その間、「面縛」された胤長を、待機する一族の座前を通過させて山城判官行村に引き渡させた。この屈辱に、義盛は反逆を決意したという。「面縛」されることは、鎌倉武士にとって、最大級の恥辱だったのである。

## ⑪『太平記』の「面縛」の例

『太平記』には「面縛」の例が四例あり（中国の故事は除く）、勝った側が敗れた側の降人・生捕りを縛り上げることが定型句的に「面縛」と称している。記事だけを抄出することにする。

・般若寺ニシテ各入道出家シテ、（中略）降人ニ成テゾ出タリケル。定平朝臣はヲ請取テ、高手小手ニ誡メ、伝馬ノ鞍坪ニ縛屈メテ、数万ノ官軍ノ前々ヲ追立サセ、白昼ニ京ヘソ被<sup>レ</sup>帰ケル。（中略）勢ヒ未<sup>レ</sup>尽先ニ自黒衣ノ身ト成テ、遁又命ヲ捨カネテ、縲紲<sup>二</sup>面縛<sup>一</sup>ノ有様、前代未聞ノ恥辱也、（卷一一 金剛山寄手等被誅事付佐介貞俊事）

・大将高豊前守ハ太股ヲ我太刀ニ突貫テ引兼タリケルヲ、舟田長門守ガ手者是ヲ生虜リ白昼ニ東坂本ヲ渡シ、大将新田左中將ノ前ニ面縛ス、

(巻一七 山攻事付日吉神託事)

・古ヨリ今ニ至マデ、喧嘩不慮ニ出来ル事多トイヘ共、未門主・貫頂ノ御所ヲ焼払ヒ、出世・坊官ヲ面縛スル程ノ事ヲ聞ズ、

(巻二一 佐渡判官入道流刑事)

・野伏共ニ生捕レテ、被<sup>レ</sup>面縛<sup>レ</sup>タル敵ヲモ不<sup>レ</sup>斬、

(巻三六 秀詮兄弟討死事)

降伏、生捕りのいずれの場合も、勝者の側が、「高手小手ニ誠(縛メ)」「肩から手首まで縛り上げ」ることを「面縛」と言い、「面縛」されることは武士として「前代未聞ノ恥辱」として描かれている。

以上、『日本書紀』の神話伝承から『太平記』までの「面縛」事例をあげてみた。『日本書紀』の①②、『扶桑略記』の④は、「降服儀礼」としての「自主的面縛」である。その間の『扶桑略記』の③は虐待のための「強制的面縛」である(ただし『扶桑略記』編纂は④よりあと)。⑤以降は、平治の乱以降の武士による罪人・嫌疑人拘禁行為、戦場における降人・生捕りの「いましめ」を「面縛」と表現している。

縄で縛り上げる行為を「面縛」と称するのは、中国史料でも古くからあるが事例は少なく、日本史料でも私が確認したものでは寛平元年(八八九)が初例であり、それ以後、用例としては永暦元年(一一六〇)まで見出せない。それは、それまで縄で縛り上げる行為がなかったということではなく、「面縛」の語が降服儀礼としての「自主的面縛」という特定の語義で使われていたからである。ところが、保元・平治の乱ごろには、それまでも武家社会で広く行われていた縛り上げて辱める「いましめ(縛め)」行為が、「面縛」と表記されるようになっていたのだと思われる。私の用例探しはまだまだ粗略なので、今後も注意を払い

ながら史料を読みたい。

この語義転換の契機となったのは、象徴的に言えば、後三年の役ではなかったかと考える。平忠常の乱では、源頼信は忠常の降服を受け入れ、随身上洛途中で死去したので、尾張の在国司の検分のもとに斬首して上洛したが、降人として扱い首級は梟首されずに忠常従者に返却されている。忠常が「面縛帰降」したと書いた史料はないが、忠常は降人として病死・斬首後も丁重に処遇されている<sup>9)</sup>。前九年の役では、源頼義は厨川柵攻城戦で柵を占領し安倍貞任・藤原経清らを斬獲したあと、逃走した安倍宗任ら一〇人以上の降服を受け入れている。『朝野群載』は「束<sup>レ</sup>手露<sup>レ</sup>身出<sup>レ</sup>来陣中<sup>二</sup>」、『本朝統文粹』は「束<sup>レ</sup>手帰降<sup>一</sup>」としているが、「束<sup>レ</sup>手」は「面縛」に近い概念である<sup>10)</sup>。元慶出羽俘囚の乱のときの「帰降之法」に準じているかのような扱いである。貞任の首級を京進するときには、入京直前に、貞任の家人に主人貞任の首級の髪を梳かすことを認め、また降服者の京進手続きも八世紀末〜九世紀初頭の「俘囚移配」に準じて行うなど、敗者・降服者を丁重に扱う姿勢が窺われる。④の藤原基通が「面縛帰降」してきたのも、このような降服儀礼としての面縛が社会通念としてまだ生きていたからである。

ところが後三年の役で、源義家は、弟義光を介した清原武衡の再三にわたる降服要請を拒絶し、生け捕られた武衡の助命を求める義光に対して、戦場で生け捕られることを降服とは言わない、と一喝した。最終的に「追討官符」が出されなかったからであるが、武衡らの首級は路傍にぞんざいに投げ捨てられた。このような後三年の役における敗者に対する徹底した仕打ちが、降服儀礼としての「面縛」を消滅させ、敗者を縛り上げて辱める「面縛」へと語義転換する道を開いたのではなからうか。

## 二、兵士装束の帯についての補遺

## 「腰底」の用例

前稿で、兵士は太刀・副弦・容器・道具などを「腰底」（腰の下）に吊り下げたり固定したりしたので、そのための装束としてベルト（「腰繩」）が必要だったと論じたが、『西宮記』（臨時四 人々装束）「野行幸」で「腰底」の用例を見つけた。天皇が鷹狩を楽しむ「野行幸」では、入野すると鷹飼は鷹を放ち、鷹の足革に結びつけていた「大緒」を「腰底」に結び懸ける、としている。鷹飼の供奉装束は「地摺狩衣・綺袴・玉帯」であり、鷹飼は「玉帯」に「大緒」を結んで「腰底」にぶら下げるのである。

また『本朝世紀』天慶元年（九三八）九月二日条にも「腰底」の用例があつた。

近日、東西両京大小路衛、刻<sup>レ</sup>木作<sup>レ</sup>神、相对安置、凡厥<sup>レ</sup>軀像髣髴丈夫、頭上加冠、鬢<sup>レ</sup>垂垂、以<sup>レ</sup>丹塗<sup>レ</sup>身、成<sup>ニ</sup>緋衫色<sup>一</sup>、起居不<sup>レ</sup>同、通各異<sup>レ</sup>兒、或所又作<sup>ニ</sup>女形<sup>一</sup>、对<sup>ニ</sup>丈夫<sup>一</sup>立<sup>レ</sup>之、臍下腰底刻<sup>ニ</sup>陰陽<sup>一</sup>、構<sup>ニ</sup>几案於其前<sup>一</sup>、置<sup>ニ</sup>坏器於其上<sup>一</sup>、兒童猥雜、拜礼慙慙、或捧<sup>ニ</sup>幣帛<sup>一</sup>、或供<sup>ニ</sup>香花<sup>一</sup>、号曰<sup>ニ</sup>岐神<sup>一</sup>、又称<sup>ニ</sup>御靈<sup>一</sup>、未<sup>レ</sup>知<sup>ニ</sup>何祥<sup>一</sup>、時人奇<sup>レ</sup>之、

天慶元年は旱魃、米価高騰、東西の兵乱の不気味な萌しによって、京内では社会不安が高まっていた。このような社会不安のなかで京内庶民の間で狂乱的宗教運動が発生した。大小路の辻に加冠垂縷男子像を安置し、場所によっては男女相對の木造を安置し、祭壇を作り拜礼奉幣した。男女相對像には「臍下腰底」に「陰陽」の絵を刻んでいたという。詳述することを憚られるような記事であるが、「腰底」は「臍の下」だったのである。行軍中の兵士が腰繩に装着した装備や雑器は、たしかに「臍の

下」で揺さぶられる。

## 兵士の装束としての帯

鹿の子遺跡出土軍士人別戎具檢閱簿にみえる「腰繩」が太刀・道具・容器を装着するベルトであることの傍証として、衣服令14武官朝服条と『延喜式』（左近衛府 大儀条）をあげておこう。

衣服令14武官朝服条では衛府官人以下の朝服装束を列挙しているが、「兵衛」装束は「皂纓頭巾、皂綬、位襖、烏油腰帶、烏装横刀、帶弓箭、白脛巾、白襪、烏皮履」、「衛士」装束は「皂纓頭巾、桃染衫、白布帶、白脛巾、草鞋、帶横刀、弓箭、若槍」とあり、兵衛の朝服の装束として「烏油腰帶」、「衛士」の装束として「白布帶」があげられている。また『延喜式』（左近衛府 大儀条）は「府生、近衛並皂綬、深緑襖、挂甲、白布帶、横刀、弓箭、白布脛巾、麻鞋、<sup>近衛加</sup>（兵衛府・衛門府も同じ。朱末額）」左衛門府大儀条、左兵衛府大儀条」とあり、六衛府府生、近衛・兵衛・衛士の儀仗装束として「白布帶」があげられている。衛府官人・舍人・衛士の儀仗装束として所定の帯が指定されているのであり、征夷軍の軍士人別戎具檢閱簿に「腰繩」（腰帶）があげられるのは自然なことであると思われる。

ここで衣服令14武官朝服条の「兵衛」が着帶する「烏油腰帶」に着目してみたい。「烏油」とは、『日本国語大辞典』によれば「荏胡麻の実から取った荏油に掃墨を加えて煮た黒色の油。塗料として用いられる」としている。「烏油腰帶」は「烏油」を塗布した黒色の「腰帶」であり、儀仗では黒帯の兵衛と白帯の衛士の陣列が、視覚的なアクセントを添えることになる。

だが帯に「烏油」を塗布するのは、本来は帯を頑丈にし撥水性を持たせるためであろう。元日朝賀・即位式以下の国家儀礼における兵衛・衛士（『延喜式』段階では近衛・兵衛・衛士）の装束の帯には太刀を佩用す



るだけであるが、戦時の軍団兵士は、行軍において帯に種々の武器・道具・容器を佩用・着帯する。「烏油」は、本来は、長期にわたって腰帯に種々の武器・雑器を装着することを可能にする丈夫さと撥水性を持たせるために、塗布されたのである。鹿の子C遺跡出土軍士人別戎具検閲簿にみえる軍士が着帯した「腰縄」には、撥水・補強のために「烏油」が塗布されていたのではないだろうか。

### 三、遠距離旅装としての履物

『本朝世紀』天慶四年（九四一）十月二十六日条に「数足踏」の文言が見える。純友の乱のキーパーソン藤原文元は、六月二十日の大宰府合戦の敗北後、逃走して行方をくらました。が、備前に上陸後、備前・播磨の国衙軍の追跡を振り切りながら、十月十八日酉刻（午後五時～七時）、但馬国朝来郡の賀茂貞行宅の門前に立ち、面会を求めた。貞行が垣根の隙間から窺くとそこには剃髪姿の文元兄弟がいた。貞行は山寺を宿所に提供し、酒宴を用意した。杯を仰ぎながら文元は語った。政府軍の追跡をかわしてようやくここにたどり着いた。汝の厚意に頼って本懐を遂げたいと思う。もしも昔の誼（よしみ）を忘れていないなら、旅装と食料と「数足踏」と従者一人を用意して我々を北陸道まで送ってほしい。無事に坂東に逃れることができたなら汝の恩は必ずや報われる、と。貞行は文元の願いどおり家の者に旅装を用意させた。丑刻（午前一時～三時）にいったん辞去して帰宅した貞行はひそかに「数百之兵」を集め、未刻（午後一時～三時）、文元の休む山寺を取り囲んだ。謀られたと悟った文元は太刀を抜いて貞行に躍りかかったが、貞行が身を顧みず矢を放つと、みごと文元兄弟に命中し、首を刎ねることができた。

この臨場感あふれる場面は、貞行自身が但馬国府に注進し政府に提出した「合戦日記」の実況報告であった。

さて文元が貞行に求めた「数足踏」とはいったい何なのか。『本朝世紀』の「踏」は、正しくは「踏」か「躑」であると思われる。諸橋『大漢和辞典』では「踏」には「はきもの」の意味があり、「躑」字には「ぞうり、わらぐつ」の意があり「躑」字に通ずとある。「躑」字は「いとぐつ。麻で作ったくつ。ぞうり。わらじ」の意である。すなわち文元が貞行に求めた「数足踏」とは、数足の「はきもの、わらじ、ぞうり」だったのである。北陸道経由で坂東まで数百キロメートルの距離を落ち延びようとする文元にとって、もつとも必要なものの一つが「わらじ」数足だった。もちろん数足で坂東まで行けるものではなく、当面の旅装であろう。

こうして、古代人の長旅においても、近世の長旅と同様、何足もの草鞋・草履を必要としていたことがわかった。延暦期の対蝦夷戦争において、坂東諸国の動員兵力が集結地点多賀城までの数百キロメートルを行軍するとき、行軍する兵士たちにはかなりの草履・草鞋を履き潰し、履き替えたことが想定される。履き替え用の草履・草鞋がどこどのように調達されたのかは、いま不明とするほかないが（自分たちで野営中に編むのか——その場合材料の麻や藁はどのように調達するのか——、路次諸国に抛出させるのか）、しかし重要な問題である。それは衛士・防人・鎮兵・仕丁・役夫・運脚などの場合も同じである。

人別戎具検閲簿三行目に、腰縄にぶら下げる雑器（水甬・塩甬・小針・縄解）と一緒に「鞋」が記載されていることには意味があると思う。前稿で推測したように、多賀城集結時に征夷軍首脳から点呼を受ける際、未使用の「鞋」を所持していることが要求されていたのではないかと想像しているが、人別戎具検閲簿の「鞋」記載位置がこのことを暗示しているのではないだろうか。

## おわりに

前稿では、「面縛」は降服儀礼としての「自主的面縛」であるから、兵士が投降者や逮捕者を「面縛」するという行為を想定する松本氏の理解は誤りである、とした。たしかに八・九世紀の戦闘のなかで発生する「面縛」は、「降服儀礼」としての「面縛」に限定されているが、人が人を縄で縛り上げる「いましめ」行為は、いつの時代でもあることであり、「いましめ」行為を「面縛」と称する早い例は九世紀末にみられ、武士の習いとして、嫌疑者・罪人・囚人に対する「いましめ」行為を「面縛」と称する用例が平治の乱後、一般化していき、逆に「降服儀礼」としての「面縛」の用例は姿を消す。『太平記』では降人・生捕りを縛り上げることを、定型的に「面縛」と称するにいたる。これが本稿の要点である。

中国でも日本古代でも敗者が自ら「面縛」して降服することを恥ずべき行為とはみなさず、勝者の側も降服者の尊厳を保証して丁重に受け入れることを善しとする理念があった。中華帝国を頂点とする冊封体制のもとで、東アジア世界では、この「降服儀礼」は国際ルールであったであろうと、前稿で想定した。それは、百済滅亡のさいの義慈王の投降の記事からも窺うことができる。『三国史記』は「義慈率<sup>（新羅）</sup>太子及熊津方領軍等<sup>（新羅）</sup>、自<sup>（新羅）</sup>熊津城<sup>（新羅）</sup>来降、王聞<sup>（新羅）</sup>義慈降<sup>（新羅）</sup>」（新羅本紀太宗王七年七月十八日条）とし、『旧唐書』は「蘇定方等討<sup>（新羅）</sup>平百济<sup>（新羅）</sup>」、面縛其王扶餘義慈<sup>（新羅）</sup>」（本紀顯慶五年八月庚辰条）としている。義慈王は「面縛」して唐・新羅連合軍の前に投降してきたとみてよからう。丁重に扱われたわけでも辱めを受けなかったわけでもないが、新羅王子法敏（文武王）は妹を虐殺された憎悪を込めて先に投降した王子隆を跪かせ「唾面罵<sup>（新羅）</sup>」し、勝利の酒宴で、投降した義慈王は地べたに座らされ、唐将・新羅王・諸将

に酌をさせられ、それを目の当たりにした百済の重臣たちは嗚咽した、という（新羅本紀七月十三日条、八月二日条）。

このように東アジア世界で戦時国際ルールであった「面縛」という「降服儀礼」は、日本が東アジア国際秩序から離脱して以降、国内の反乱鎮圧（追討・追捕）においてははしだいに捨て去られ、やがて武士の習いのなかで「面縛」の語は語義転換し、勝者が敗者を縛り上げ見せしめにする侮辱的行為を「面縛」と称するようになっていった。私はその転換が、象徴的には後三年の役における源義家の清原武衡の降服要請に対する対応にあったのではないかと想定してみた。「生きて虜囚の辱を受けず」という、東条英機が旧陸軍全将兵に示達した「戦陣訓」の、投降・捕虜を恥辱とみなし、数多の兵士・民間人を死へと追いやった思想の根源を、この「面縛」の語義転換のなかに見出すことができるかもしれない。新たな「面縛」は、東アジア世界で広く通用してきた戦時国際ルールから離脱した日本列島で、独自に成長した「武士」によって生み出された観念であった、といってもいいであろう。

本稿ではまた、兵士装束の腰縄（縄帯）には、補強し撥水性をもたせるために「烏油」が塗布されていたのではないかと推定するとともに、遠距離行軍には兵士旅装として大量の草鞋・草履を必要としたこととその調達方法の解明の必要性を指摘した。

本稿で述べた事柄は、それ自体としては些末な問題である。しかし、それらが律令軍制の根本問題と深く関わっていると考えるからこそ、少し深入りして検討してみたのである。

## 註

- (1) 『続日本紀研究』三八七号 二〇一〇年
- (2) 小林春樹「中国史上における『面縛』の機能と性格およびそれら

- の変遷について」『東洋研究』一五五号 二〇〇五年)
- (3) 「軍団兵士と『腰縄』」『続日本紀研究』三八一号 二〇〇九年)
- (4) 堀河天皇を今上天皇とすることから、最末記事の嘉保元年(一〇九四)から堀河天皇の崩じた嘉承二年(一一〇七)までの成立とみられる。
- (5) 惟宗忠行が、「忠行全以不<sub>レ</sub>好<sub>二</sub>武勇<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>弓箭<sub>一</sub>、如<sub>レ</sub>形相<sub>二</sub>携文簿<sub>一</sub>こと主張して義絶状を作成し、報復の応酬から離脱したことは、武士論において注目すべきである。
- (6) 曾祖父康季が白河院北面になって以来、代々院北面に祇候していた文徳源氏源定康(『尊卑分脉』は「康季—近康—康信—定康」とする)であろう。
- (7) 保元の乱で左大臣藤原頼長家人として戦い逮捕されて源義康に処刑された平光弘(『尊卑分脉』は「貞盛—正濟—貞弘—正弘—家弘—光弘」とする)とは別人である。
- (8) 小林春樹「中国史上における『面縛』の機能と性格およびそれらの変遷について」『東洋研究』一五五号 二〇〇五年)
- (9) 『日本紀略』長元四年(一〇三二)四月二十八日条、六月十六日条、『小記目録』同年五月二十日条、『左経記』同年六月七日条、十一日条、十二日条、『扶桑略記』同年六月十八日条、『百鍊抄』同年六月二十六日条。
- (10) 『日本紀略』承平六年(九三六)六月某日条では、承平南海賊が伊予守<sub>二</sub>追捕海賊使紀淑人の「寛仁」を聞いて、「魁帥小野氏彦・紀秋茂・津時成等、合三十余人、束<sub>レ</sub>手進<sub>二</sub>交名<sub>一</sub>帰降<sub>一</sub>」したといい、『扶桑略記』承平六年夏六月条にも同様の記事がある。

# 大学院演習『小右記』講読担当者一覧③

## 演習日

## 担当条

## 担当者

二〇〇〇年

四月二日 長徳三年一〇月一日条

五月 七日 長徳三年一〇月一七・一八日・二二日・二八日・三十一日・九月九日条

五月二日 長徳三年一〇月九日・一八日条

五月九日 長徳三年一〇月一八日条

五月二六日 長徳三年一〇月二二日・二六日・三十一日・六月一日・六日・十一日・十六日・二十一日・二十六日・三十一日・七月一日・六日・十一日・十六日・二十一日・二十六日・三十一日・八月一日・六日・十一日・十六日・二十一日・二十六日・三十一日・九月一日・六日・十一日・十六日・二十一日・二十六日・三十一日・十月一日・六日・十一日・十六日・二十一日・二十六日・三十一日・十一月一日・六日・十一日・十六日・二十一日・二十六日・三十一日・十二月一日・六日・十一日・十六日・二十一日・二十六日・三十一日・長保元年七月二日条

六月 九日 長保元年七月二日・三日条

六月一六日 長保元年七月四日・五日・七日条

六月二三日 長保元年七月八日・九日条

七月一四日 長保元年七月一〇日・十一日・十二日・十三日・十四日条

七月二八日 長保元年七月一五日・一七日・一八日・一九日・二三日・二四日条

二〇〇一年

四月十三日 長保元年七月二五日・二六日・二七日・二八日・二九日条

四月二〇日 長保元年八月一日・三日・四日・六日・七日条

四月二六日 長保元年八月八日・八月九日・一〇日条

五月一七日 長保元年八月一〇日・一九日・二〇日・二一日条

五月二四日 長保元年八月二二日・二三日・二四日条

大津 智子

曳野 悟

小島 莊一

渡邊 誠

渡邊 誠

渡邊 誠

三輪 誠一郎

曳野 悟

渡邊 誠

渡邊 誠

渡邊 誠

渡邊 誠

渡邊 誠

渡邊 誠

渡邊 誠

渡邊 誠

渡邊 誠

渡邊 誠

渡邊 誠

渡邊 誠

渡邊 誠

渡邊 誠

渡邊 誠

渡邊 誠